■いわて文化ノート

旧暦は暮らしやすいか

専門学芸調査員　瀬 川　　修

はじめに

今年も新しいカレンダーを求める時節になりました。最近、旧暦というものがたいへん注目を浴びているようです。旧暦のひなまつりは全国的に行われるようになりましたし、旧正月や旧盆というように、旧暦も生活の片隅に生きています。

現在、私たちが使っている太陽暦（新暦）が採り入れられたのは、意外にも古く、明治6年（1873）のことです。つまり、新暦・旧暦とはいうものの、現在旧暦で暮らした経験のある人は一人もいないのです。ですから、意外に旧暦は正しく知られていません。そして、旧暦は自然に合うとか、旧暦は美しいなどといった声も聞こえるようになりました。本当でしょうか。

月の満ち欠けと大小

旧暦は陰暦ともいい、月の満ち欠けを基準としています。旧暦では今日が3日であれば、月はほぼ三日月です。新暦、つまり太陽暦の現在では、暦を見なければそれがわかりません。

さて、月の満ち欠けの周期はおよそ29.5日です。したがって、ひと月は30日と29日を交互にする必要がありました。これを月の大小といいます。旧暦では大小が交互というわけではありませんでした。そこで写真1のような表示が必要でした。これを大小板といい、商店などに掛けて、今月の大小を知らせました。つまり、暦か大小板を見なければ、今月が大の月か小の月かがわからなかったのです。

うるう月と二十四節気

単純に計算すると、旧暦の1年は354日で、太陽暦と比べて11日足りなくなります。これを繰り返すと、真夏に正月が来ることになり、そのままでは季節と暦が一致しなくなります。

写真 1　大小板　雫石町歴史民俗資料館蔵　大の面。裏は小と書かれている。

そこで、季節との整合性を高めるために考え出されたのが、二十四節気です。二十四節気は1太陽年を24に分けたもので、およそ15日ごとにやってきます。立春から始まり、雨水・啓蟄（けいちつ）と続きます。時候のあいさつ、季節の変わり目としてすっかりおなじみです。この二十四節気が旧暦では大切な役割を果たしているのです。

二十四節気のうち半分を節、半分を中（ちゅう）とよんで、中（ちゅう）のほうを、月を決める基準としました。たとえば、1月には必ず雨水が入ることになっています。ところが、この二十四節気はほぼ15日間隔であるため、ひと月のなかに中があらわれないことがあります。その月はうるう月を入れることになっていました。

うるう月は、うるう5月というように、同じ月を繰り返すことをいいます。ひと月を繰り返すのですから、季節と暦はかなりずれることになります。

このように、旧暦は必ずしも季節にあうとはいえないようです。

このような暦を太陰太陽暦といい、略して陰暦ともいいます。旧暦とはこの暦のことをいっています。なお、旧暦は太陽暦に比べて1ヶ月ほど遅れていると思えばよいでしょう。

昔の暦とはどんなものか

昔の暦は日めくりでも月ごとでもありませんでした。昔の暦はほとんどが冊子で、1日1行で毎日のことがらを表していました。江戸時代には江戸暦のように販売用の暦が作られました。もっとも、庶民の暦はもっとわかりやすい、1枚に書かれた暦でした。これらを略暦といっています。

写真2は盛岡で出版された舞田屋版の略暦です。舞田屋といえば南部絵暦で有名ですが、このような略暦も出版していたのです。これを例に暦の内容を見てみましょう。

まず、中央の上段に記されているのが、諸神の方位です。なかでも歳徳神の方角はあきの方とか恵方（えほう）といって「万よし」、この方角を拝まなくてはなりませんでした。今では節分にこの方角に向かって手巻き寿司をたべるという妙な風習が広まりつつあります。

二十四節気は各月のなかにすべて書かれてあります。中段には、八十八夜、入梅、半夏生、彼岸、社日などがあり、これらをあわせて雑節といわれました。

それから、「田植え（よし）」「田刈り」といった、現在ではまったくみられないものもあります。下段には日々の吉凶が記されています。

このように、昔の暦は今日は何月何日で何の日というよりも、日の吉凶を見たり、「今年の節分は2月3日だ。」という

写真２　天保15年略暦（舞田屋版）1844年

ように、備忘録のように使われたと思います。暦は日めくりではありませんので、今日が何月何日かということをどうやって知ったのでしょうか。

伝統的な行事の問題点

よくいわれることですが、伝統的な行事の七草や桃の節供は、季節的に早すぎます。太陽暦では季節があわないといわれます。だから、旧暦はすばらしい、季節によくあうというのですが、それはどうでしょうか。もともと旧暦の行事を約１ヶ月も違う太陽暦でやっていることに無理があります。たとえば、本来七夕は梅雨の最中の行事ではなく、8月の秋の行事なのです。

しかし、これらの行事の多くは日を変えられません。昔から中国では、7月7日のように、ひと桁の奇数が重なる日はおめでたいとされました。五節供といいます。もし、旧暦でやろうとすると、暦を見なければわかりませんし、毎年変わりますからとても不便です。ちなみに今年の七夕は8月26日でした。

これに対して、旧暦で通している行事があります。十五夜です。十五夜は満月でなければ意味がありませんから、どうしても旧暦8月15日に行います。その年の十五夜を知るためには、暦を見なければなりません。今年の十五夜は10月3日でした。

それから、お盆は7月15日を中心とする先祖の霊をまつる行事ですが、多くは8月に旧盆として行っています。8月のお盆を正しくは月遅れのお盆といいます。旧暦のお盆はやはり暦を見なければわかりません。便宜的に１ヶ月遅らせたわけですが、多くの人は8月をお盆の月と思っているのではないでしょうか。お盆は本来7月の行事です。

このように、伝統的な行事に関して旧暦は暮らしにあうとか美しいというのは、旧暦の行事を新暦で行うために起きる誤解なのです。また、二十四節気は季節を感じさせますが、これは太陽の動きに基づくもので、太陽暦です。

これで、旧暦がちょっと不便だということはおわかりいただけたかと思います。

梅雨の不思議

さて、今も昔も暦の上では「入梅」はあるのですが、「梅雨明け」はありません。入梅は田植えなどの時期を知るために必要でした。岩手県の北部では、漆掻きの始まりもまたこの頃でした。このように、農作業などの目安として入梅が必要とされたのです。

それに対して、梅雨明けがないのは、入梅ほど生活には関係がなかったのでしょう。現在、梅雨明けをはっきりさせたいのは、夏休みやレジャーと大いに関係がありそうです。

現在ではご存じの通り、梅雨入りや梅雨明けは暦とは別に気象学的に判断しています。

しかし、今年のように梅雨明けを特定できなかったり、あとで大幅に修正される年もあります。気象学的にも梅雨明けを判断するというのは難しいようです。

それならば、今か今かと待つよりは、暦の上で梅雨明けを決めてしまったほうがいいような気がします。

そこで提案ですが、たとえば、7月の中旬くらいに「梅雨明け」という日を設定してはどうでしょうか。私は7月20日の「海の日」がよいのではないかと思っています。しかし、関東より西ではちょっと遅いと感じるかもしれません。

「入梅から1ヶ月後」とする方法もあります。現在、暦の上での入梅は自然科学的にきまっていますから、梅雨明けもだいたい7月11日頃に決まります。

暦で季節を感じるというのは、暦のもつ役割のひとつです。そのうち天気予報で「今日は暦の上では梅雨明けですが、外は雨降りです」というようになるかもしれません。